

<要旨>

1959年（昭和34年）に紀伊半島に上陸した伊勢湾台風は明治以降最多の死者・行方不明者5,098名に及ぶ被害をもたらした。被害の大部分は高潮によるものであり、伊勢湾周辺地域、特に湾奥部の名古屋市を中心とする臨海低平地に大被害を引き起こした。

東京湾は、この伊勢湾、大阪湾に並ぶゼロメートル地帯の三大湾であり、伊勢湾台風クラスの大型台風が東京湾を襲った場合、多くの人々と産業が被害を受ける可能性があると予測した。

そこで本研究では、伊勢湾台風と令和元年東日本台風を研究の対象とし、研究を進めていく中で得た教訓をもとに、東京湾沿岸ゼロメートル地帯でなされている対策の課題点を見つけ出し、その課題点をもとに進めていく。また、地球温暖化による海面上昇の影響、大潮の満潮という最悪の条件下で伊勢湾台風クラスの大型台風が上陸しても被害を最小限に抑えるためにはどのような備え、新たな対策が必要なのか調査・考察していきたい。